

党旗

号外版

1980-11-27
党旗社

編集・発行人 中村光雄
東京都墨田区亀沢3-27-3
マル青同中央本部
〒130 電話 (03)624-2481
後援 東京190784
関西地区事務所
電話 066319-2354

帝国主義打倒！
社会帝国主義打倒！
万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！
マルクス主義青年同盟

労働者階級は、 三無ファシズム解体の全人民的 政治行動を湧き起こし、 社会主義文明で

全国、全戦線をおおいつくせ！ 社会主義の人間像とは何か

一、今秋期闘争をめぐる総括と情勢
社会主義協奏統合止揚運動の勃興

中央集会（共産党系）
十一月二十八「赤旗」の音楽と讃頌の夕、全大学人集会（共産党系）
十一月二十「いのちとくらしを守る」秋闘勝利中央総決起集会（春闘共闘会）

労働者の同志諸君、労働人民、青年婦人諸君、
今秋期、鈴木「越憲」三無ファシズム培養内閣に反対する様々な連
続闘争は、多くの人民大衆に、国家統治という問題を教育し、そして、
すべての政党、政治勢力を、ただ一点共産主義運動に対する態度を
ぐる分解と統合と再編の中に投げこみ、七〇年代の城内平和を支えて
きた全政党関係を根本的にかえることを介して、共産主義に近づき、
共産主義をとらえ、共産主義と結びつく上でのいろいろな政治障害を
とり除いていく、全人民的政治行動の条件を急速に培養している。
まさに戦争と革命の問題とは、自国政府に対する態度の問題であり、
あらゆる階級勢力、政治勢力の動向は、一点、この国家と政府の問題
をめぐって揺れ動き、誰が、どの階級が、どんなやり方で、なんのため
に、どこに向かって、国家を動かす、それを通じて国民を組織して
いくのかをめぐる大分解と、大再編と大統合のルンゾをめざして集中
され吸収されていくのである。

連日の集会場できり上げられてい
った、マル青同と、この七〇年代の転
向、挫折文明との攻防戦、これまでの
集会ではみられなかった壇上での「乱
闘」騒ぎ、しかし、不思議なことにこ
れらの「乱闘」に、従来の目共と新左
翼、あるいは青年協等の「内ゲバ」騒
ぎでは、必ず権力の介入があり、調
停をしたものだが、この連日の攻防
は、まったく解放的に、ある時は、太
陽の下での大激論として、ある時は
少々手荒な、とびゲリ等もまじえな
がら、メガネの一二つをとばしな
がら、ある時は、雷雨下でズブぬれに
なりながら、日本の共産主義運動の
歴史の断絶から派生した、あらゆる
転向・挫折の文明をあげきだし、さら
けだし、その隠微な、積年の根をもつ
た思潮を、ブルジョア権力がその間

われわれは、この連続闘争の結論として現情勢における当面する
政治生活において人民のとるべき態度、その政治基準について次のよ
うに提起することができる。
第一に共産主義運動の歴史的統合を支持する。
第二にあらゆる反共反共主義的あるいは反ソ的となる場合もある（
排外主義キャンペーンにくみしない）。

第三に現在の自民党政権を廃絶することを伴わないあらゆる軍備増
強、軍事人同化、改憲、越憲運動に反対する。

第四に帝国主義的政治反動と人民に対する軍事的苦役の強化に抗し、
政府に反対するあらゆるたちあわれと行動を支持し、拡張する。

この結論から、三無ファシズム解体の全人民的共同行動を湧き起こし
ていかねければならない。そしてこの闘争は、この行動規範を問いつく
連続闘争がそうであったように、かつてこれまで経験したこともない
見たことも聞いたこともないような形態の闘争が必要とされるのであ
る。

（二）二週間あまりの連続闘争の過程、マル青同が直接「出役」した
集会だけを数えてみて、

十一月二十六「軍事費削減をめぐって」福沢教育の充実をめざす大運動」

マル青同

連絡先：東京都墨田区亀沢3-27-3 マル青同中央本部 ☎624-2481

に介入し、ボナパル、「調停者ぶる」ということを排して、肯定的に、廃絶する理性と行動力を培養していったのである。

この一連の闘争で明るみに出されたことこそ、現代世界には、二つの型の戦争、二つの根本的に異なった性格の戦争があるということにほかならない。

一つは、まさに民衆を、人類を際限のない餓鬼道に引きずりもどす資本家諸君の略奪的目的と排他的権益のための戦争、諸国民の分裂と憎み合いと排他的相互反発の上に立ち、これに奇食し、これを固定化するところによってのみ資本家の利潤をあげられるという限られた地域や、資源を強者の論理に従って再分割するための戦争。

今ひとつは、多くの人が一時不可知になったが従来の略奪的餓鬼道の戦争とけまったく異なるタイプの、そう、歴史を創造し、人類の未来を築くための方法、そのやり方をめぐって、その理性の形式や、政治目的の相違をめぐって争われ、この対立や敵対をより、高度な段階で統合するための——前者が互いを憎み合い、けおとし合う戦争であったとするならば、それは異なる、互いを結局は高めあい、交歓し、止揚していかざるをえないような型の戦争——社会主義協奏競合戦争——である。

七九年、中越戦争以来の第三次再分割戦争の中盤戦への移行、いわば、第一次共産主義再分割戦争——に対する態度が、日常の政治生活の中で問われているのである。「社会主義と戦争」の問題、関係をどのように理解し、評価するかをめぐってあらゆる理性が、二分されはじめているのである。

同志、友人諸君、
未来を切り開くために苦闘し、飛躍せんとする社会主義と、奇食し、生命力を失い、不毛化し、もたれあい、民衆を略奪文明におとしこめておくことでしか生きながらえることのできない資本主義、これこそが現代世界の根本的対立にほかならないのである。

われわれは、開始された、社会主義協奏競合止揚運動に、自己防衛をはかることなく、帝国主義的好戦主義者たちに対しては、ただ弱々しい抗議の声をあげるだけでなく、歴史創造の主人公となるために闘い、社会主義建國のための正義の戦場へと勇躍赴くことこそがわれわれ人民の唯一回答である。

二、共産主義運動の歴史的統合の旗をおしたて、転向・挫折文明の平定作戦を完遂せよ。

この社会主義協奏競合止揚運動は、国家独占資本主義の戦時国家独占資本主義への移行と、一方で共産主義運動の歴史的断絶が生み出した、国家統治という問題に対する社会的断絶をうめつくす闘いゆえ、もつれた糸を解きほぐす、一進一退の、まさに「社会主義革命」とは、一つの行動ではなく、二つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級的諸衝突の一時代であり、全戦線にわたる、すなわち、経済上および政治上のあらゆる問題に関する長く続く、いくたの戦闘であつて、この戦闘は、ブルジョアジーの収奪としてのみ終わらうる「(レニーン)という通りの闘争である。

国家と革命の問題をめぐって、一方の極に、組織者、統治者としての活動を日夜堅持し、広範な被指導大衆やルンペン的失業者にも職を与え、仕事や任務を割りふり、常に現状をなんらかの形で変革する方策を考へるべく一握りのグループと、他方の極にそれを当然のごとくなんの義務も課さずに受け入れ、自分よりも他人の方に余計多くの分配がいったと不平をならべたてることが己の「使命」だと心得、自分の惨状や無能ぶりや奇食性も、すべて、国のせい、政府のせい、それをうち破れないのは、社会主義のせいとする「各人は自分のためだけに、指導者だけは万人のために」ということが骨の髄までしみこんだ被統治の天文学的低文明と、他方である歴史的時期に、ある形態、やり方を通して社会主義に接近していった集団、人々がこの社会主義の核心問題をつかみ組織者としての立場への移行を聞いてる前夜で、その転化と移行の飛躍に失敗し、そのことで社会主義を聞いてることをあきらめ、社会主義と結びつく団結を自から失い、歴史の裏舞台へと後退し、ここで生じた社会集団内部の矛盾や意見の相違を協奏競合的社会的運動をもって解決することができずに、相互に自己防衛主義と反発に陥り、組織と運動のいちじるしい分散化と無政府状態を異化し、

他の人々がありとあらゆる形態を通じて、社会主義へ結びつくこととすることを否定しなければ己の地位がなく、己がやってきたこと自身が否定されたと感じざるをえない隠微な立場へと自らをおとしこめるという転向・挫折文明の複雑な立場へと自らをおとしこめるというのである。そして事態がより複雑なのは、一方で共産主義運動に対するまったくの低文明から「共産主義的用語」と普通の人々の「政治的慣用語」のズレが大きい——例えば、マル青同が労組員に「諸君、今こそ日和見主義指導部と手を切り、プロレタリア組織を結成せよ」とアザシれば、その党員が言っていることは「日和見主義的思想的影響はなされて、その影響下にある多くの人々をねばり強く説得するための活動に人れ」と言っているのであるが、ところがそれを聞いてる組合員は何を思っているかといえは、もう明日にも組合大会で現執行部の不信任選挙をやり、その場で直ちに組合を脱退して別組織をつくれと言っているのか、それはとてもムチャな話だ」とうけとっているという具合である。そしてまた、この低文明も、七五年以降——労働運動でいえば「スト権」スト以降——はまったくの無知ではなく、半ばまったく反対意見の中で公然と自分の意見を述べずぐにはかわりそうでない諸関係の中で持続的に革命的な大衆行動を培養する革命工作者としての活動とは何かを見て、知っておりながら、ある程度意識して、それを正面から扱い評価することを避けてきたうえで、の問題ゆえに、実際の攻防を前にして、マル青同排除に「任務だから、上からいわれ」と参加した人が、翌日には党員に「マル青同が反革命ではない」ということはわかっているけど大衆がついてこないからなあ」といってぐる国労の活動家が出て、乱闘になる前から、隊列に「カエレ、カエレ」といつてきた、都教組の中にもいるようなオヤジサンが、いざなり合いになった瞬間、血相をかえてとびこんできて「そこまでやることとはなんだ、ただ出してやればいいんだ、ヤメロ」と言ったり、複雑な二重生活ぶりを発揮する人々がいっぱい出てくるのである。

このようにして、積極的「社会的断絶」はうめつくされていくのであり、その闘争は、一握りのハナツマミモノからその奇食思想と転向・挫折文明による激しい公然と隠然たる抵抗と妨害をうけながら拒絶的理性を強制的に二分していき、その連続した展開からのみ、転向・挫折文明と、大衆の無知文明との結びつきを急速にとり払い、戦時の三無ファシズム解体の全人民的政治行動が培養されていくのである。

そして、このように闘いこそが現在の奇食的ボナパル的政府の基礎そのものを解体する闘争なのである。七〇年代後期の人民運動抑止・寸断の攻撃とは、反共主義とは、共産主義運動の不統合状態をつきあげつらい、これを利用して、人民勢力を擾乱せんとするものであり大衆の無知や、小さなオノレの窓からしか物事を見れない偏狭的排他的思想があつてはじめて延命できるというものにほかならないのである。この点においては、自民党ほど共産主義を真剣に研究しているものはいないのである。

この奇食制度の基礎そのものを解体し、あらゆる奇食思想や活動の奇食的存在の余地を除去することによってあらゆる人民運動の細流を統合していくことこそが、この協奏競合運動の意義なのである。

この社会主義的協奏競合止揚運動を正しく記憶し、われわれの勢力を正しく計算し、正しく全国民に分配し、すべての労働大衆にこの全行動に理性の力で参加させ、思想を解放していくことこそ先進的労働者階級の来春季までの任務にほかならない。

起て、戦時の理性と行動力の獲得をめざして、
来たれ、社会主義建國統治を習得する正義の戦場へ、
開け、全人民を社会主義に向かわせるための情勢を、
集え、共産主義の理性を解放する党旗の下に、
共産主義運動の歴史的統合の旗をおし立て、八二春季に向け、転向・挫折文明の平定作戦を完遂せよ、
マル青同の下に結集せよ、

九八〇年十一月二十七日